

## 第12回モニタリング委員会の議事概要



第12回モニタリング委員会の議事概要（1/2）

分類	No.	質問・意見等	委員会での回答	備考
モニタリング結果や今後のモニタリングについて	1	水位変動型実験地の土砂は今後安定するのか。現状の状況で安定し、裸地が多い状態が維持できれば、シギ・チドリの飛来地と期待できる。	掘削直後のような激しい土砂の動きは無くなってきているが、大規模な増水が繰り返されるうちに、少しずつ堆積し将来的には陸地化していくと考えられる。	
	2	環境学習フィールド(3)で水質の調査をしているが、CODは年間を通じて概ね低かった。また出水前後でCODに大きな差はなかった。独立型の池が増水で冠水を受けても、地下水で涵養されており、早期に水質が改善する可能性がある。		本年度、緩衝帯地区の水路から独立した実験地において、水質のモニタリングを開始した。
	3	全面冠水する渡良瀬遊水地では、独立型の池の水質が貧栄養であるか確認するのは難しいと思われる。	全面冠水することは数年から10年に1度である。出水後であっても地下水の涵養により、時間の経過とともに水質が改善されると思われる。その様子をモニタリングで確認したい。	
	4	再生したヨシの品質や形状も調べる必要があるのではないかと。地場産業であるので、ヨシズ作りに使えるヨシ原を創出するよう努力してほしい。	ヨシの質に関する調査について実施の可否を含めて今後検討を進めたい。	本年度、ヨシズ作りに適したヨシ原がどのようなものであるか、文献調査や聞き取り調査を行っている。また、良好なヨシの生育地と実験地のヨシ原を調査し、ヨシの特性や土壌の条件などを比較する予定である。
	5	調査が植物に偏っていると思われる。渡良瀬遊水地の生物多様性を把握するという観点から、動物の調査も実施してはどうか。	湿地の保全・再生の観点から、まずは植物を把握することが重要と考えている。ある程度、植物が安定してきた段階で動物についても調査していきたい。	昆虫に関しては、掘削との関係を把握できるか確認するため、本年度モデル地区を設定し試行調査を開始した。
	6	実験地の池では、水草は少なく、水生動物の棲み場所の少ないの池が多い。このままでは、今後、池を増やしも、生物多様性が向上しないことが危惧される。現状を評価するためにも、池の中の水生生物についてもきちんとモニタリングする必要があるのではないかと。	水質との関係性も含めて、実験を行いながら、水草の再生方法を検討していきたい。	水草の再生実験として、湿润環境実験地(2)にて、底泥の撒き出し実験を実施し、本年度モニタリングを開始した。
	7	独立した池において水草のための撒き出し実験を行っていただきたい。	水草については、湿润環境実験地(2)で、底泥の撒き出し実験を実施する。	
	8	・鳥類について、渡良瀬遊水地野鳥観察会では、チュウヒやオオセッカの繁殖調査やシギ・チドリの渡来状況調査などを実施しており、貴重な資料が蓄積されてきている。是非、今後の検討に活用していただきたい。 ・住民協議会では、「市民による生き物調査」を実施している。是非、今後の検討に活用していただきたい。	どのように活用できるか事務局で協議したい。	今後、事務局で、市民の調査結果を収集・整理を行う予定。

第12回モニタリング委員会の議事概要（2/2）

分類	No.	質問・意見等	委員会での回答	備考
今後の掘削について	9	スゲ原再生を目的とした撒き出し実験はぜひ行っていただき、その結果をもとに範囲を広げて行っていただきたい。		環境学習フィールド（3）拡張部-1内に、表土撒き出しを基本としたスゲ原再生実験地を造成した。
	10	大型鳥採餌休息環境実験地についてハクチョウを対象とする場合は、水深は1m以内の浅い池であること、マコモやヒシなど餌となる植物が繁茂することが重要。また、コウノトリやサギなどを対象と考えると、餌生物（カエル類など）が生息出来る浅場が必要である。	大型鳥採餌休息環境実験地は、1/30～1/60と緩やかな掘削勾配としているため、水深の浅い平場から、水深の深いところまで多様な水辺ができると考えている。餌となる植物については、植生の生育状況をモニタリングし、必要に応じて改善策を検討する。	来年度より、大型鳥採餌休息環境実験地でのモニタリングを開始し、水位や植生の生育状況を確認する。
	11	鳥を主眼にした実験地を考えるとすると、水田のような水深が浅く、定期的に人為的な攪乱を行うような実験地も検討してはどうか。	水田ではなく、攪乱を行う実験地ということであれば検討できると思われる。	環境学習フィールド（3）の南側に隣接する曝気ヤードの範囲において、人為攪乱型実験地の造成を検討する。
	12	植物にとって攪乱が継続している状態は望ましい。攪乱されない場合、土壌の栄養分が豊富なため、水深が浅い場所にはガマなどが繁茂し、鳥が降りられなくなると思われる。また、攪乱によって維持された湿性裸地には絶滅危惧植物も多く生育する。		
	13	水田が困難であれば、攪乱を目的とした実験地を検討してはどうか。環境学習フィールド（1）の攪乱箇所はニホンアカガエルの繁殖場所にもなっていた。		
	14	次期掘削の「次期」とはいつか。	次期掘削候補地は3つあるため、順次できるだけ速やかに実施していきたい。早いところでは平成28年度中に着手できる場所もあると思われる。	
植物の保全・維持管理について	15	回復困難種は、種によって掘削の影響や効果が異なると考えられるが、掘削後に見られなくなってしまうものについては、今後は種ごとの保全対策を検討する必要があるのではないか。	ご指摘の通り種によって掘削後の回復状況が異なる状況が分かってきている。種ごとの特性を踏まえて、保全対策を検討することは可能と考えられる。	種子の採取・保存方法や種子からの栽培方法、掘削地への移植などについて、文献調査や検討を行う。
	16	ヤナギの増殖の原因と考えられるヤナギ高木林を除去できないか。	ヤナギを利用している生物もいることから、いろいろな方のご意見を伺いながら今後の方策を検討したい。	
	17	環境学習フィールド（1）などにおいて、ヤナギ類を減らすために火入れする実験ができないか。	ヨシ焼きの関係者との協議が必要である。	環境学習フィールド（2）において、ヨシ焼き前に刈り取ったヨシを撒いておき、ヨシ焼き時に焼失を促す実験を行う予定である。
	18	セイタカアワダチソウは、春から秋にかけて中心に年数回の抜き取りをすることによってかなり抑制できることが、これまでの市民活動を通じて分かってきた。		
その他	19	渡良瀬遊水地内でイノシシを度々目撃している。安全性の確保という観点からも、イノシシ対策を考えてもらいたい。	地方自治体の対策状況を確認する。	別の委員会（渡良瀬遊水地保全・利活用協議会）で対応を検討中である。